犬猫のリンパ腫における細胞診断による
T／B 判定とクローナリティ検査の一致率

二瓶　和美[1),2)]、吉田　桂子[2)]、内田　和幸[3)]、小野　憲一郎[1)]、小川　博之[1)]
1）日本動物高度医療センター、2）サンリツセルコバ検査センター、3）東京大学獣医病理学研究室

【はじめに】犬猫においてリンパ腫は最も一般的な造血器腫瘍であり、獣医領域では特に高グレードリンパ腫を細胞診のみで診断・治療する場合が多い。細胞診は非侵襲的で迅速診断が可能な検査法だが、リンパ腫は腫瘍細胞の免疫表現型が予後や治療に関係するため、細胞診で T/B 分類まで判定出来れば非常に有用である。本研究ではリンパ腫の細胞診における T/B 判定の精度についてクローナリティ検査の結果と比較・検討した。**【材料と方法】**日本動物高度医療センターにおいて、細胞診でリンパ腫と診断した 84 例(犬 63 例、猫 21 例)を用いた。塗抹標本はギムザ染色を実施し、主に新 Kiel 分類に基づき診断した。クローナリティ検査は塗沫標本を用いてコマーシャルラボで実施した。**【結果】**リンパ腫と診断した犬 63 例のうち低グレード 9 例、高グレード 54 例、猫 21 例は全て高グレードであった。クローナリティ陽性率は犬 56/63 例(90%)、猫 14/21 例(67%)であった。細胞診で判定した免疫表現型とクローナリティの結果が一致した症例は、犬 47/63 例(75%)、猫 8/21 例(38%)であった。一方、細胞診で判定した免疫表現型とクローナリティが異なる症例は犬 6/63 例(10%)、猫 4/21 例(19%)であった。また、細胞診で T または B と推測したがクローナリティが T/B 両方で認められた症例は犬 3/63 例(5%)、猫 2/21 例(10%)であった。**【考察】**犬では細胞診による T/B 判定とクローナリティ結果の一致率が高く、細胞診は悪性度や表現型を含むリンパ腫の迅速診断に有用であった。一方、猫では細胞診の T/B 判定とクローナリティの一致率が低く、クローナリティ陰性症例も 1/3 あるため、リンパ腫の診断および T/B 分類には細胞診とクローナリティ検査を合わせて総合的評価する必要があると考えられた。